

JBIA 洋書輸入協会会報

Vol. 32 No. 2 (通巻369号) 1998年2月

東京国際ブックフェア'98—見学記



撮影：丸善(株)出版事業部・服部修治氏

今年も1月22日(木)より25日(日)まで4日間に亘り東京国際ブックフェア'98が、有明の東京ビッグサイトに開催された。主催は洋書輸入協会を含む出版関連7社によるブックフェア実行委員会です。今年の出展社総数は、国内と海外を合わせて423社(対前年120.5%)。展示会場も昨年の1.5倍と広くなり、4日間の入場者数も4万人(対前年121%)を越えたとのこと。

先ず会場に入ると、場内は大きく分けて4つに区分けされる。入口より奥に向って海外出展社のブースが並び、更にその奥にフランスのパピリオン、そこを挟むようにして両側に日本の各出版社・書店の展示ブースが顔を揃える。正面より一番右側に電子出版・マルチメディアの展示場がある。国内大手の出版社は、広い区画を使用しコンピュータを配置し、デコレーション・ディスプレイにも凝っており、いかに多くの人を呼び、引き付けるかに重点を置いているように見えた。電子出版・マルチメディアのコーナーでは、よりそれが顕著であった。またこのコーナーでは、文字情報のデジタル化を行う電機メーカーや印刷会社、またソフト商品を展示販売する会社や情報サービス会社等の関連業種からの参入も多く見られた。

ブックフェアの併催イベントとしては、例年人気を博している洋書バーゲン、造本装丁コンクール展、第4回IPA国際著作権シンポジウム、JPICによる特別講演会、出展者による無料公開セミナー、サイン即売会、東京国際ブックフェア専門セミナーがあった。また今年には日本におけるフランス年として、フランス人作家によるシンポジウムや対談、フランス文化紹介コーナー等、フランス関連のイベントがいろいろ開催された。専門セミナーでは、ここ数年のマルチメディアブーム、インターネットの個人への普及を反映して、インターネットによる書籍販売、マルチメディアソフト流通の将来像等の興味あるテーマがもたれた。またインターネットやデジタル化

目次

東京国際ブックフェア見学記	1	文化厚生委員会だよりほか	3	雪道で転ぶ人転ばない人	6
新年懇親会	2	パソコン外論考(其5)	4	広告	8
理事会報告	3	出版文化史逍遙24	5		

に伴う著作権は、新たな問題をもたらし、さらに議論を要するところとなっている。

今年のブックフェアも来場者、出展社数を大きく伸ばしこの面では成功したといえる。しかし日本の出版社の陰に隠れてしまった感のある海外38カ国・地域の117社にとっての成果はどうだったのか。共同出版・版權売買を掲げていた東南アジアの出版社の成果はあったのか例年のことながら気になることであった。国際ブックフェアの名を掲げている以上、また更なる国際化を目指す

ためにトータルでの発展がないとこの先、単なる書籍・ニューメディアの見本市になってしまうだろう。私の回りでもこのフェアに対しマンネリ化、期待感の薄れといった声を聞く。本当の意味での国際ブックフェアになれば、早急にその魅力を失ってしまうだろう。

最後に、主催者各団体に今大会運営の労に感謝いたしますと共に、より魅力あるブックフェアにするためにご尽力をお願いしたいと思います。

(三省堂書店 沼尻 卓)

新年懇親会

恒例のJBIA 新年賀詞交換会はパレスホテルに於いて1月9日(金)午後6時より開催された。関野理事/文化厚生委員長の開会の辞を幕開けに、鈴木理事長の年頭のご挨拶(1月号掲載)に続く斉藤理事の乾杯の音頭で開宴した。

<斉藤理事ご挨拶>

『西暦2000年を間近に控えて、過去半世紀に及んで今日の日本を構築した社会経済分野でのインフラストラクチャーが、その実効性を失い始めて10年余りが経過しております。このエロージョン現象はとみに我々の業界にも昨今たいへん顕著であるという感じがします。我々の先輩が築き上げ、保管しました学術文献、洋書流通の仕組みを我々はグローバルな見地に立って補完し、更に発展させて行かなければならない責任があると感じております。いずれにしても、不透明な、先の見えない困難な年の幕開けと存じますが、我々が今日まで培った経験、体験、知恵を念頭に、もっとポジティブなスタンスで前向きにこの局面に対応したいと思います。本日ご来会の協会の皆様のご健闘とご健康を願ひまして、盃を上げたいと思います。乾杯!』

宴半ばで神田前事務局長と高橋新事務局長からそれぞれ退任と新任の挨拶があった。5年間にわたり事務局の運営に苦勞された神田さんには惜しめない感謝と慰労の

拍手がおくられた。最後に中林理事より次のようなご挨拶があり、賑やかに散会となった。

<中林理事ご挨拶>

『平成10年の洋書輸入協会賀詞交換会がたいへん和やかなうちに催されたことを嬉しく思っております。振り返りますと去年は日本の政治においても、経済においても、為替についても有史以来の大変動があり、たいへんな年であったと思います。洋書輸入協会会員の皆様方それぞれもたいへんな事があろうかと思いますが、一つの特殊な協会としての洋書輸入協会がこのように和やかに、皆で力を合わせて行けば素晴らしい協会として発展して行くのではないかと思います。最近丸善さんもたいへんやる気を出しておりますので、どうか至らぬ点を皆さんでご支援していただくよう私からもお願いします。日本の政治も行政改革が叫ばれております。洋書輸入協会も行政改革をして行かなければならないと思います。その意味では今年5月15日の総会は洋書輸入協会の行政改革の第一歩が飾られるであろう、そして過去の延長線上の洋書輸入協会ではなく、新たな、改革された21世紀に向かった協会のスタートが出来ることを心から祈念しまして、ご挨拶いたします。』

今年も去年とほぼ同じ約180名の会員諸兄弟にご出席いただき、折からの寒さも不景気も無縁の盛会であった。



理事会報告

1月27日(火)

1. 12月収支につき総務委員長報告を承認した。
2. 委員会活動
 - ・規約改正案を98年度総会に上程することは時間的に、また総会運営上に無理がある旨の総務委員会の意見具申に基づき、遅くとも本年末を改正案取りまとめの目途とすることとした。(総務)
 - ・東京国際ブックフェア'98/洋書バーゲンセールでは昨年とほぼ同じ売上を記録、ブックフェア中最大の目玉企画として定着した。(事業)
 - ・恒例のビアパーティが今年は7月10日(金)に催される。多数の参加を望む。(文化厚生)
 - ・98年版の製作はほぼ予定通り進行している。(ダイレクत्रीー)
 - ・1月14日に「マルチメディアと著作権」講演会を文化庁・板東著作権課長を講師に迎え、26社より約60名の出席を得て開催した。(広報渉外)
3. 「共同物流提案・アンケート」はより詳細なデータが得られるよう質問事項の一部を改めて実施する。
4. 規約改正委員を委嘱した全員の承諾が得られたので2月より委員会が発足する。

規約改正委員会発足

1993年改訂の現行規約全面見直しを期して、「規約改正委員会」が発足し、その第一回会議が去る2月13日(金)午後2時より協会事務局に於いて開かれました。委員は各委員会副委員長を中心に以下の方々に委嘱しました。(敬称略)

渡辺正憲(理事)、大倉光弘(理事代理)、
新田満夫(前特別委員)、松浦拓己(総務)、
平岩 寧(会報)、池田篤治(広報渉外)、
東條 巖(ダイレクत्रीー)、鶴 三郎(文化厚生)、高橋 紘(事務局)

互選により渡辺理事を委員長に選出、理事会の決定に従って今後の改正作業の進め方、スケジュール、改正のポイント等について協議した結果、3月より実質的な改正作業に入ることになりました。

文化厚生委員会だより

新年囲碁会

エルニーニョによる暖冬でまだ一月だと言うのに大雪に見舞われつつある東京、その悪天候の合間になった1月14日(水)に恒例の打ち初め会と懇親会が石毛八段(元日本棋院理事)を迎えて、これも通い慣れた高田馬場囲碁クラブと揚子江(中華料理店)で開催されました。石毛先生はすっかり健康を取り戻され以前と変わらぬお顔つきでした。楯さん(テクニコン)も久しぶりに参加されましたが、今回の参加者は総勢7名と寂しいかぎり。昔は20数名と大家族だった同好会も、長年尽くされた多くの先輩達が定年退職されたこと、新陳代謝がないこと等を考えると、高齢化がすすみ先行きが案じられる今日この頃です。

個人的には楯さんに5子でご指導頂けたのは今後の自信に繋がりそうです。「ヘボ」でも大いに楽しく予定を40分もオーバーしてしまいました。夜半より大雪の予報でしたが、やはり「守りの固い」碁の愛好者には雪女も近づきがたかった(それとも、高齢者だから?)のでしょう、天気もったのは幸いでした。

土曜日の「囲碁・将棋講座」(NHK衛星第2)や日曜日の「NHK杯」(NHK第3)での印象と異なり、石毛先生のお話では若い層が薄くなった日本棋院の経営はなかなか大変そうです。若者にとって興味の対象が数限りなくあるのですから、止むを得ないのかも知れません。しかし、「囲碁」は日本の文化のひとつであり、そして今や国際的にも広く愛好者の多い競技です。日本がリーダーとしての地位を脅かされないように若い強豪がどんどん育てて欲しいとつくづく思いました。

【囲碁同好会 荒木亮一】

お知らせ

この度下記の会員が事務所を移転されました。

会員名: カンダ ブック トレーディング株式会社

新住所: 〒206-0034 東京都多摩市鶴牧1-3-10

シティハウス多摩204

TEL: 0423-57-7650

FAX: 0423-57-7651

移転日: 1998年1月26日

パソコン外論考 (其5)

宇田川一彦 Udagawa Kazuhiko

◆ありのまま/Just the way you are.

不時不食、割不正不食、

He did not eat food that was not properly prepared nor did he eat except at the proper times. He did not eat food that had not been properly cut up.

(論語/郷党・Confucius: The Analects/Book X)

【超拙意訳；先生は、朝昼晩の食事以外はとらなかつた。まあ、間食はなされなかつたわけ。また、動物の肉を食べるられときは、その部位ごとの切り方が正しくないものは食べられなかつた】

[外註；「時ならざる、食らわず」に関しては、別説があります。朱子の新注では、季節外れのもの食しなかつたと解釈します(紀元前の漢時代にすでに、温室栽培、英語圏では greenhouse、の野菜が出回っていたというから、新注の訳でもいいかぁ、と思いましたが)。うん、でもここは、古注の説(鄭玄の説)に拠っています]

閑話休題。新年とともに、旧友・友人・知人・朋友・畏友・師友からの「挨拶状」が、届きました。なかでも、某大手電化メーカー重役を経て、子会社の社長を務めあげ、郷里に隠退。PC(Personal Computer)三昧宣言を実行すべく、1クラス3名の個人指導・初心者向け・熟年者大歓迎の「パソコン入門塾」を開塾した旨の挨拶。

添えられた1行が憎いものでした。師友というべき化学技術者としての彼の一言に感動。

『一般の人のパソコンは数年前の物で十分ですね』。

もう1通。旧友からのもの。某雑誌の付録CD-ROMに収められていた Internet 用閲覧ソフト(ブラウザ browser といいます)の IE(Internet Explorer) 4.0 新版(評判が今2ぐらいなので、危ないと思っていたそうだが……)を苦心惨憺の末に組み込み、使ってみたらなんと愛用のソフト(もち、同業他社のもの)が、動かなくなつたという嘆きとも諦念ともつかない便りでした。

なお蛇足ながら、この version を示す4.0版というのは、昔から競合他社のものと同じ number にするのが、user の目くらましに最適と考える「慣習」があります。

この Internet 用 browser の世界では、いまや飛ぶ鳥も勝手に落ちる程、限りなく独占状態に近い OS (Wind

ows95や WindowsNT) 占有率を誇ります Microsoft 社も、某社の後塵を拝しています。この土けむりを出していたのが、競合他社である Netscape Communication の NN (Netscape Navigator) 4.0 です(あやうく、「でした」と書きそうになりました)。旧聞に属しますが、この追上げのために、IE4.0 発売元 Microsoft 社は、当然その占有率を楯に勢いを借りて、PC メーカーに「抱合せ」販売を強要していた旨で、昨年10月アメリカ司法省から提訴されました。で、12月に「抱合せ販売」中止の仮決定が出ています。

日本でもかねてから囁かれていた事なのですが、遂に今年1月13日公正取引委員会が、同社日本法人に立入り調査。結果が(日本は手緩いから)……。

蛇蛇足。それにしても、大手書店のパソコン本棚には、「サルでも」「わかる」「できる」「使える」と大強調した「IE4.0」解説本が、所狭しと並んでいます。老婆(爺?)心ながら、言い切れることは、『この類の解説本は買ってはいけません』。

正直言って、こんな「猿」以下に扱われたりする本をお金を出して購入すべきではありません。なぜなら、小生などは、「猿」でも分かるのに、分からなかつたらどうしょう? と考え込むタイプですから……。タイトルを読んだだけでヤメます。それにしても、刺激的なタイトルはいいのですが、編集者のセンスを疑います。

と、同様に「わかる・できる・使える」と言う類の本も、「わからなかつたり・できなかつたり・使えなかつたり」、どうしょう? という苦労症のため、これもタイトルを見ただけで手にしません。もし、わからなかつたり、できなかつたり、それに使えなかつたりしたら、Product Liability 法(PL法=製造物責任法)でカバーしてくれるの?。まあ、端的に言えば、なんでこんなに多くの解説書発売されているのだろう? と、疑問を抱いてください。大体が「できる・わかる・使える」の類の本がごまんと出るほど IE4.0 という browser は、「できない・わかりづらい・使えない」と自らが宣言しているようなものに違いありません。と、言い切ります。

要は、世界一の richman が率いる件の OS 発売元の日本法人とパソコン出版雑誌社がつるんで(ちょっと下品な言い方ですが、また漢字で表現すると、「交尾んで」)出している解説本と考ればいいのです。

紙数が尽きました。次号は、現時点でのパソコン購入の疑問点を考えてみたいと思います。(乞御期待)

ウェブスターの輸入と日本近代化〔3〕

丸善・本の図書館 鈴木陽二

◆幕末・明治初期のウェブスターの所蔵状況(1)

ここで幕末・明治初期におけるウェブスター辞書の所蔵状況を、いくつかの目録によって見てみることにしたい。大雑把ではあるが、日本にウェブスター辞書がどのように存在していたのか、その様子を知っていただければ幸いである。

将軍慶喜は大政奉還後隠居し、徳川家第15代当主の家達が一大名として駿河に所領をもらって転封したが、その折り紅葉山文庫を除いて幕府所蔵の図書を一緒に移転させ、新たに設立した駿府学問所や沼津兵学校の蔵書とした。紅葉山文庫は明治政府によって継承されて現在内閣文庫に所蔵されているし、駿府に移った幕府旧蔵書は「葵文庫」として静岡県立図書館が所蔵している。駿府学問所も沼津兵学校も徳川家が洋学教育を目的に設立した教育機関であり、これら二つの教育機関は日本の近代化の先鋒として大きな役割を果たしたが、ここではそれに触れない。

さて、この葵文庫の『江戸幕府旧蔵洋書目録』(昭和42年「静岡県立中央図書館葵文庫」発行)には2,325点の蘭書および英独仏書が収録されていて、蘭書の流通が主であった江戸時代における英独仏書の輸入の詳細が判明する数少ない資料として貴重なものであるが、そこにはウェブスター辞書が5点、ウスターが2点掲載されている。ウェブスターは、ウィリアム・G・ウェブスターによる縮抄版『英語解説発音辞典』(1856年ニューヨーク版)、1862年ロンドン版の『英語大辞典』、『ユニバーサル英語発音語義辞典』(1863年ロンドン版)、グッドリッチとポーターによる改訂増補のロンドン版『コンプリート英語大辞典』(1864年)、発行年発行地不明1点となっている。ウィリアムによる縮抄版は発行年が異なるが福沢諭吉や中浜万次郎が万延元年に持ち帰ったものと同種のものであり、蕃書調所時代(1856=安政3年~1862=文久2年)の収蔵である。刊行が福沢たちの版(1959)より古いのでそれ以前に流入したものと思うが、時期や経路は不明である。『ユニバーサル』は開成所印があるので、これも比較的早くから収蔵したものであろう。それにしても、ロンドン版が多いのはなぜであろうか。想

像の域を出ないが、幕府の留学生はイギリスを含むヨーロッパが多かったことと何か関係があるのではないだろうか。ちなみに、駿府学問所や沼津兵学校に招聘されて教鞭をとった人材は、中村正直や外山正一、西周などこの時代の一級の洋学者で、明治時代に入ってからも各界で近代化推進に指導的役割を果たしている。

東京開成学校というのは、幕府の開成所を明治政府が引き継いだ高等専門学校で、東京大学の源流のひとつであるが、『東京開成学校所蔵英語図書目録』(明治8年)というのが現存していて、明治初期における高等教育機関がどのような洋書を所蔵していたかを見ることができる。その目録にはウェブスターの辞書が6点掲載されており、それぞれの所蔵冊数は記載しているが発行年の表示はない。それによると、『初等辞典』185冊、『ロイヤル・オクタヴォ版』(グッドリッチによる改定増補のリピンコット社版と思われる)146冊、『小学生辞典』96冊、また『アカデミック辞典』(ウィリアム・G・ウェブスターによる簡約版)というのは81冊、というように大量部数を所蔵し、外国の辞書をなかなか購入できなかった学生の便宜を図っていた様子がうかがえる。また、親版の『アメリカ大辞典』(刊年不明)は18冊である。低学年用辞書の所蔵が多かったのは、英語があまり普及していなかった時代の語学力を反映し、そういう利用動向に合わせた集書であったのだろうか。

東京開成学校は明治10年(1877)に東京医学校と合併して東京大学と改編されることになるが、その年の明治10年に発行された『東京大学 法理文学部図書館英語文献蔵書目録』というのを今日でも見ることができる。この目録には5種類のウェブスター辞書が掲載されているが、刊行年号の表示はないし、また所蔵している冊数は記されていない。そこには『アメリカ大辞典』の「クオート版」と「オクタヴォ版」、『小学生発音辞典』『英語解説発音辞書』『初等発音辞典』などが見られる。「クオート版」というのは、元版の系統を引く四つ折り版のことであり、縮刷版は八つ折り版(オクタヴォ)にして刊行されたものが多かったものでそのどれかであろう。刊行年不明のため、どの版か確定できない。

雪道で転ぶ人転ばない人 一歩行認識の違い？

島岡 丘

東京は雪に弱い。少しの雪でも交通機関の麻痺、交通事故、転倒による入院などが起こる。北国では雪が多く、去年の雪がそのまま地上を覆い春の到来まで解けない根雪となる。雪道の運転は危険で嫌なものだが、雪国に住んだことを思い出して、雪が積もると楽しい気分になる。道路の雪よけの仕事や、雪道を歩くことは気にならない。

東京に住んでいる人は雪道でなぜよく転ぶのだろうか。その理由は、あとで考えることとして、転ぶということは、雪道を歩くということが前提になる。転ぶことを私なりに解明する前に、歩くという人間の行動を考えてみよう。歩行は両足を交互に前に出して進む。歩くということのことをことばで定義するとどうなるだろうか。

『ケンブリッジインターナショナル英英辞典』(略して、CIDE)によるwalkの定義は次のようになっている。

walk : to move along by putting one foot in front of the other, allowing each foot to touch the ground before lifting the next (片方の足を上げて、もう一方の足を上げる前に着地させ、地面につけたほうの足をもう一つの足の前に置くようにして進む)

私たちは、ふだんはこのような歩くという行動を何となくわかったようなつもりで過ごしている。歩くという動作だけでなく、例えば、テレビの前に座っていれば、テレビの画面からいろいろな情報が流れてくる。ただ座っていればそれで情報が何となくわかった気になる。しかし、このような生活パターンに慣れてしまうと、「観客症候群」のような人間にならないとも限らない。上の定義のように、ことばによって、明確に概念を明らかにするというのを怠りがちになる。どの時代でも物事を客観的に記述していくという試みはなされなければならないし、以上のような、walkの定義は例えば歩くロボットを制作するというプログラムを作るときには必要な知的活動であろう。

さて、歩いているとき、雪道で転ぶのはどんなときだろうか。おそらく片方の足の踵を地面につけ、体重をか

けた瞬間に起こるはずだ。普通の歩行なら、踵が着いたら、踵を軸に徐々に体の重心を前のほうに移動し、爪先まで重心がかかると別の方の足に重心が移ることになり、前進するわけである。ところが踵に重心がかかる前は足を前方に押し出す力が働いており、地面が滑りやすいとそのまま前に滑って転んでしまうわけである。

北海道の人は転ばなくて東京の歩行者はよく転ぶという理由を考えてはよう。私はこれは前提に問題があると思っている。つまり、一般には、道路の表面は足を支えてくれる安定した表面である、という大前提がある。足底が地面についたら、そのまま自分の体重を乗せても大丈夫であると無意識に考えている。しかし、北国の人はそうではないようだ。着地する地面そのものが不安定で、滑りやすいものと思って歩く。この前提が転ぶか転ばないかの分かれ道になるのではないだろうか。たとえ滑りにくい靴底のものを履いても足元に対する前提が違っているとやはり、転ぶであろう。

親は雪道を歩く子供にどう注意するだろうか。ただ、気をつけて歩きなさい。転ばないようにね、と言うだけでなく、どう気をつけたら転ばなくてすむかヒントを与えてやりたい。道路が滑りやすいときは、足が滑らないように、踵から歩かず、足全体を地面につけて歩きなさい。と言うとよいだろう。あるいはもっと分かりやすく、踵からではなく爪先から歩きなさいと言えば、子どもはそのように歩き、転ばなくて済むだろうし、転ぶ理由が子どもなりに納得するだろう。

私は北海道で10数年を過ごしたせいか、雪道を歩くのは慣れていていると思っている。高校に通ったときは、通学はみなゴム長靴を履いていた。初めはゴム長靴の底は溝が深いので滑りにくいですが、根雪の道を毎日半年間も歩いているとゴム底がすり減ってしまい、溝がほとんどなくなってしまうのである。そのようなとき、道路が滑りやすくなるのをむしろ楽しくなっていた。つまり、歩くよりは滑りながら前進したかったのである。特に橋を渡るときは楽しんだ。石狩川にかかる橋の上は横風が強いせいで雪があまり積もらず、ほとんど凍った状態の歩道を歩くことになる。それはスケートのイメージで歩くようなものだ。特に橋の傾斜しているところは、滑るのでスピードがつく。高校時代の私は道路を滑りながら歩くとスキーの練習にもなるという思いで滑りながら歩くのを楽しんだものである。

しかし、一番危険なのは足を前に滑らせて後頭部を打

つことである。転ぶときは横に倒れるようにするとよい。予め転ぶ時は横に倒れる、ということを入力しておけばよい。また、スケートをするときに必ず帽子をかぶっていることが万一の衝撃を和らげることになる。実際に後頭部を打つと、目から火が出るという感じである。しかしすぐ起きあがらないと後ろから来る早いスケーターにぶつかって大怪我をすることになる。気を失ってしまうわけにはいかない。

冬季長野オリンピック大会によってスキーに対する関心が高まったようだ。100分の1秒を争う競技は別として、スキーは楽しいスポーツだ。トニーザイラー主演の映画はまだその映画音楽と共に楽しい思い出である。大人になってしばらく振りにスキーをしたとき、スキー学校に入ったが、スキーコーチは、一度もスキーを履いたことがない人にスキーを実に巧みに教え、2、3時間で滑られるようにする。私が上に述べたような重心云々など面倒な言い方はしない。ずばり、イメージから教えるのである。例えば滑るとき的心得として、赤ちゃんを抱いているような感じで滑るといいと教え、赤ちゃんを抱いたことがない若い初心者にはバスケットボールを1つずつ腕にかかえている感じで滑るように言い、さらに恐いと思ったら恐いと思う方を覗くようにと伝えた。そのようなイメージを抱いて滑ると確かに滑りやすいし、転ばないのである。実際のスキーの指導もそのイメージを抱かせて滑らせる。初めは慣れさせるために一番安全なボーゲン（股を開いて八の字の形で）ゆっくり滑らせ、それから重心の移動によってスキーは自然に曲がることを教える。スキーをしない人には意外に思われるかもしれないが、左に回りたいと思ったら、重心を右の方に移し、右に回りたいと思ったら、左足に重心をかけるのである。スキーコーチは重心ということばを使わずに、左回りのときは右手を雪面すれすれに下げるように言い、右回りは左手をそのようにするよう言う。手を下げると下げたほうの手に重心が移るからだ。また、恐いと思うとどうしても体の重心が山頂のほうに傾いてしまうので、スキーのエッジが雪面に食い込みバランスを失い、転倒してしまう。やはり、恐い方が斜面の下の方だが、そちらの方を見て滑るように伝えていた。

慣れてくると理論的に考えなくても体が覚えてしまい、苦勞することはなくなるが、何でも初めはたいへんである。初めにイメージや概念を挿んでしまえば、後はそのパターンの繰り返しであり、自然に慣れてくる。イメー

ジを掴まない内に暗唱のようなことをやると、かえって悪い癖ができてしまい、またそれだけを覚えても応用や発展がなくなってしまうおそれがある。

一例を挙げると no more than～の表現と no less than～の表現である。前者は「～しか」で only に相当し、後者は「～も」で as much as～または as many as～の意味であるとして覚えても、何らかの実際のイメージと結びつくと気楽に覚えられる。具体例として、財布に1万円あるとしよう。これを1万円もと解釈するか、それとも1万円しかと解釈するかで表現が別れる。

I've got no more than ¥10,000 in my purse.
が前者の意味で、

I've got no less than ¥10,000 in my purse.
が後者の意味である。この文を暗唱するよりはむしろその発話時の気持ちを考えれば、上記の～の部分にいろいろと語句を入れて発展的にまた創造的に表現力をつけることができる。

日本語でも外国語でも共通しているのはことばは気持ちを表すということである。そこで、どんな前提をもって表現しているかが分かれば解釈もずいぶんしやすくなるものだ。同時通訳者はことばだけを訳すわけではないそうだ。事前調査で講演者の背景や知識、専門分野など講演予定の内容とはあまり関係ないことも知ろうとする。発話の前提がわかり、内容の解釈が容易になるという。

前提という問題を社会的な事象に当てはめてみると、かなり多くのことが説明がつく。国旗掲揚の反対を唱えた団体は、おそらく次のような前提をもっていただに違いない。国旗が、国民の団結心を高め、国の力を強化することにつながる。したがって、国力を弱めておくことは「軍事大国」にならなくてよいであると考えたであろう。しかし、国力が弱いと国際的にはその弱みにつけまれば惨めさを味わうことを実感すればそのような前提は吹き飛んでしまうだろう。憲法論議についても武器をもたなければ周りの諸国はこちらに敬意を表して攻めてこないというような前提があったらうし、そのような前提を覆す歴史的な事件はこれまでずいぶんあったはずである。柔軟な考え方、前提そのものを疑う批判精神はいつの世にも大切なのであろう。

(茨城キリスト教大学教授)

Encyclopaedia of Mathematics *on CD-ROM*

絶賛発売中!!

CD-ROM版 数学百科全書

by Michiel Hazewinkel, Centre for Mathematics and Computer Science, Amsterdam
Kluwer Academic Publishers, Dordrecht, The Netherlands 1997年12月発売

Single-user license ISBN 0-7923-4807-9 Dynatext2.3使用 ¥ 37,130

Multi-user license ISBN 0-7923-4805-2 Dynatext3.1使用 ¥ 277,300

数理科学者・数学を駆使する総ての研究者必携の「数学百科全書」が、一枚のCD-ROMになりました。書籍版全11巻7,600項目、合計5,200頁分の情報が収められています。トピック検索、ハイパーリンクによる関連項目参照等の多様な検索ツールや、アニメーション、対話式3次元ビューアーといった電子出版物ならではの機能を搭載したCD-ROM版「数学百科全書」は、手軽にご利用頂ける本格的リファレンスソースです。

The *Encyclopaedia of Mathematics on CD-ROM* is a Dual-Platform ISO9660 CD-ROM, and can be used on PC (Windows) and Macintosh machines. The information on the CD-ROM is based on the *Encyclopaedia of Mathematics* on paper, published by Kluwer Academic Publishers. The complete text of this work can be found on the CD-ROM. Of course, the text is strongly hyperlinked and hierarchically structured. Many pictures in the printed version have been provided with animations, of two kinds; Mathematica movies and 3D-objects. Moreover, all programs for generating the movies and 3D-objects are supplied on the CD-ROM.

[CD-ROM版の特徴]

- Desktop access to 7,600 entries
- Interactive visualization of 3D objects
- Mathematica® Notebooks containing programs and animations
- Advanced search capabilities: full text- wildcards-, Boolean-, proximity- & structure aware searches & predefined search forms
- Fully hyperlinked Text & formulas dynamically displayed with scalable fonts
- Possibility to create personal annotations; notes, bookmarks and hyperlinks
- Selective printing and export
- Possibility to export source code for formulas directly

システム必要条件

シングルユーザー版: Windows [3.1, 95] 又は Macintosh [System 7.0以上]
単体のパーソナル・コンピュータ専用
マルチユーザー版: Windows [3.1, 95, NT] 又は UNIXワークステーション*
ネットワーク仕様。より多様な検索機能付き
*[Solaris (Spacr, X86&, PowerPC), SunOS4. x, 5. x, SGI IRIX, HP-UX,
IBM AIX, DEC OSF/1 v3.0, Unixware]

株式会社 ニュートリノ

本社 〒182-0024 東京都調布市布田1-44-3 高橋ビル TEL 0424-84-5550 FAX 0424-84-5556

E-Mail neutrino@st.rim.or.jp

1998年2月 通巻第369号 洋書輸入協会 編集者 高橋 紘
☎103-0027 東京都中央区日本橋1-21-4 千代田会館5階20号室 ☎(03)3271-6901 FAX.(03)3271-6920

印刷所= 藤本綜合印刷株式会社